

人格の対人的診断法の研究*(3)

— 人格のレベル (多層性) について —

戸 莉 正 人

(教育心理学研究室)

(平成2年9月28日受理)

I 人格の多層性について

1 人間行動の深さ

Leary, et al. の診断体系の第2の特色は, Sullivan, H. S. にならぬ, 対人行動 (人間の行動) に《深さ》を考慮した点にある。⁽²⁾

Sullivan の貢献の一つは, 対人関係 (対人行為, 対人認知) の信じられないほど複雑な性質を実証したことにある。^(2,4) 対人行動は, あらわな行為のみか, プライベートな知覚, 意識的報告, 象徴的表現 (空想, 夢), および知らぬ間の表現をも含む。さらに, 《Parataxic distortion》の介入が加わる。これは, 現在の対人経験を, 過去の対人経験のタームで歪曲することをいう。Freud が《転移》と呼んだ現象のことである。この歪曲が, すべての対人関係を特徴づける誤解の素である。

ところで, 人間の行動には深さがあること, いくつかのレベルがあることは, 直観的には, 数世紀も前から認められていた。ところが, 心理学の中に, 無意識の動機なる概念が公式に導入されたのは, 20世紀初頭, Freud, S. によってである。⁽¹¹⁾ それによれば, 人間の行動は, 単なる意識的動機にしたがうものではない。意識的動機と無意識的動機の葛藤しつつある多面的な複合体であるという。これは, 人格の研究にとって画期的な事件であった。

現代の人格の心理学のエッセンスは, その多次元的, 多層的性格にある。Freud 以後の心理学が, 人間行動の深さ, 人格の多層性を考慮しないとしたら, 不思議といわねばならない。人間は, 単に外からみられた姿のみではない。ケッセルの『昼顔』のヒロインのように, 昼と夜と二つの顔をもつこともある。また, 自分の思っていることが自分のすべてと思いがすが, 人はだれでも自分の知らない (かくれた自分) をもっている。外からの観察のみにもとづく人間理解や, 当人の報告のみにもとづく人間理解は, 共に一面的であり, 皮相な人間理解にとどまる。

2 今日的人格研究の問題点

* 前報までは, 「対人関係の研究」なる表題を用いてきたが, 最近では, 社会心理学の分野の研究と混同される恐れがあるので, 研究内容を直截に表わす表題に改めた。

今日の人格研究の大部分は、依然として一面的 (unilevel) である。その概念においても、研究計画においても。行動の単一のレベルの研究にかぎられている。

① 行動主義的アプローチ

行動主義的志向の立場では、伝統的に“外部的アプローチ”をとり、第三者の立場からの行動観察を固守し、外から直接観察できる〈あらわな行動〉のみをデータとする。したがって、主たるデータの蒐集法は、他人による行動観察と評定である。このアプローチによれば、〈私とは、他者にみられたままの人間である〉ことになる。

② 現象学的アプローチ

意識心理学の流れを汲む現象学的志向の心理学は、“現象学的アプローチ”、または“パーソナル・アプローチ”を強調し、当人自身の見地からの、内側からの理解を基礎とし、《当人自身の認知》をデータとする。主たるデータ蒐集法は、当人による意識的報告である。このアプローチによれば、〈私とは、私のみたままの人間である〉ことになる。

③ 精神分析的アプローチ

精神分析的志向の第三の立場は、“深層心理学的アプローチ”をとり、行動のかくれた側面、《無意識の動機》の発見に関心する。空想や夢の報告、知らぬ間の表現（自由連想法、投影法テストへの反応）が主たるデータ蒐集法となる。このアプローチによれば、〈私とは、分析家によって解釈されたままの人間である〉ことになる。

以上の、三つの立場（アプローチ）は、それぞれ、一つの行動の三つの異なる側面（あらわな行動、意識的報告、かくれた願望）の中、どれか一つを打診するにすぎない。どれ一つとして、それだけでは他を代表することはできず、どれ一つとして、そのみでは、一人の人間を、その存在の深みにおいて、また、その多面性において理解することはできない。人格研究の結果についての一般化も、その多くは、一面的 (unilevel) アプローチによって無力にされている。

人間の深さ、多面性、多次元性を考慮した、総合的な人間理解のアプローチが必要であろう。

3. 人格への多層的アプローチの前史

① 西欧の精神分析学

Freud, S. は、最初、行動のレベルを意識、前意識、無意識なる三層の重層構造として定式化した。^(12,13) さらに、無意識の層に、本来の無意識（抑圧されたもの）と、抑圧するもの（倫理的検閲者）の二つを含めた。これらは、後に、エス、自我、超自我という、心的装置としての、パーソナリティ構造論に吸収された。⁽¹⁴⁾

Jung, C. G. も無意識に二つの層を区別し、自我（意識的な心）、個人的無意識（抑圧されたもの、無視された経験、意識されなかった経験から成る）、集合的無意識（無意識の深層、超個人的無意識、人類に普遍的なもの、人間が遺伝によって祖先から受継いできた思考と行動の様式）の三層構造を考えた。^(15,16)

Murray, H. A. は、Freud と Jung を総合し、無意識過程に深さを考慮し、四層構造とした。1) 意識的精神過程、2) 無意識の表層（以前は意識されたのに無意識化したもの、習慣化、自動化したもの）、3) 抑圧されたもの（制止、または抑圧されて無意識になった諸傾向

≡Freud のいう無意識), 4) 無意識の深層 (人類の遺産として受け継いだ諸傾向と小児期の経験の痕跡を含み, 人類の知恵, 神の啓示, 創造性の源泉 ≡Jung のいう集合的無意識) の四層である。⁽³⁾

② ドイツ性格学の層位説

ドイツの性格学にみられる層位説の立場からは, “性格” の重層構造観が提示されている。

Rothacker, E. は, 人間の心理的構造に四つの層を区別している。1) 自我層 (Ich-Schicht) : 人性層の中心。2) 人性層 (Person-Schicht), 3) 植物的, 情緒的層: 生物全般に共通, 動物的生活の層。4) 深層人の層。⁽⁶⁾

Lersch, P. は, 層位説の重層構造観を発展させ, 人格 (Person) を, 1) 精神生活の上層構造と, 2) 内部感情的基底の二層に大別した。上層部には, 意志と知性 (抽象能力, 判断力, 合理的思考) などが属し, 深層部には, 生命感情, 自己感情, 指向的感情と, これらの感情に対応した諸欲求が含まれるとした。

Gruhle, H. W. は, 人格に, 次のような七つの層位的序列を設けている。1) 自己 (自尊) 感情, 2) 環境処理, 3) 自己への関係づけ, 4) 意志領域, 5) 感動惹起性, 6) 根本気分, 7) 活動性。⁽⁷⁾

層位説の重層構造観は, 心的機能の発生的層位は, 生物学的な脳髄の発生的層位にもとづくともみるもので, 精神分析学派の重層構造観とは性格を異にする。

③ 唯識のこころの構造

東洋においては, 2,500年の歴史をもつ仏教の中に, 現代心理学に優る知見が, すでに得られていた。東洋の人間学といわれる唯識仏教においては, 人間のこころを, 表層から深層に向う八つの重層構造をなすとする。まず, 一ばん表層にある〈前五識〉 (眼識, 耳識, 鼻識, 舌識, 身識の, いわゆる五官の働き) と, その背後にあって, それを支える〈第六意識〉 (知, 情, 意, 想像力など, いわゆる心の働き) を考えた。ここまでは, 日常われわれが自覚しているこころの活動である。しかし, それだけでは, 人間を捉えつくせない。そこで, 〈第六意識〉の底に, さらに深遠な自己 (深層意識) を考えた。それが第七末那識と第八阿頼耶識である。〈第七末那識〉は, 意識の底に深く潜む, 我執のこころであり, 自我意識, 自己中心性, 利己心のこころである。さらに, 心の最下層に横たわる広大なこころを, 〈第八阿頼耶識〉とする。これは, 深淵のような暗闇の自己であり, 深層の自己である。具体的には, 過去の経験の痕跡であるが, その性は, 無覆無記といわれる。非善非悪の無色透明な世界である。⁽⁵⁾

唯識では, こころの主體的側面を, 〈心王〉という。それを唯識では, 〈八識〉と〈三能変〉という二種類のとらえ方をする。〈八識〉とは, 人間のこころが表層から深層に向って八つの重層構造をもつとするとらえ方, 〈三能変〉とは, こころが三層をなし, 深層から表層へと向って, 対象に能動的に働きかける面をいう。因みに, 〈八識・三能変〉の心王観を完成したのは, 世親 (400~480年) であるといわれる。⁽⁵⁾ 1500年も前のことである。(なを, 唯識の原典とされる, 世親の『唯識三十頌』⁽¹¹⁾ では, 深層から表層への順に説かれているが, 便宜的に逆の順序で記した)。

このような, 唯識仏教の心の〈八識・三能変〉説は, 現代心理学の科学的方法とは異なり, 実践的修行と内省的な思索という仏教独特の方法によるものであるが, 人間の心の深さに対する, その鋭く深い洞察は, 心理学にとっても学ぶべきところが少くない。それに比べれば, 心理学の歴史は短かく, その洞察は浅い。西欧文化としての現代心理学と, 東洋の人間学を統合

した、新しい人間学の樹立が期待される。

II 人格のレベル（原法の場合）

① 目的

Leary, et al. の人格の対人的診断法の第2の特色は、先述の如く、その multilevel アプローチにある。すなわち、Sullivan にならい、対人行動に“深さ”を考慮し、それを《レベル》の概念によって表わし、人格をいくつかのレベルより成る多層的体系（組織）として捉える点にある。

もともと Leary, et al. の対人的診断法の開発目的は、第一に、その序言にあるように、人格の multilevel モデルの開発と、第二に、人格の各レベルの対人的表現の測定技法の開発にあった。(2, P. V)

② 作業原理

まず、人格のレベルの決定（分類）に関する作業原理の一つは、人格のいかなるデータも、人格の全体制を抜きにしては、評価しえない。〈人格についての如何なる陳述も、それが言及する人格のレベルを指示しなければならない〉というにある。(2, P. 41)

作業原理の第二は、〈人格の、どのレベルの対人行動の測定にも、同じ変数体系を用いること〉である。(2, P. 43) そうすれば、レベル相互間の比較から、レベル間の体制化の仕方—すなわち、人格の多層的構造の診断が可能になる。

③ レベルの決定

人格のレベルの数の選択は、上限を経験的実用性により、下限を理論的適合性により定めている。レベルの数を余りに多くすれば、レベル相互間の組み合わせは途方もなく多くなり、余りに少ないと、重要なニュアンスが失われる。そこで、人格のデータの多様なタイプとソースを検討した結果、次のような五つのレベルの分類を最も効果的としている (2, P. 76) (Table 1)。

ただし、人格に五つのレベルを考えるとしても、データの分類上のことであり、“実際に”，また“永久に”そのような構造的区分があるという意味ではない。現時点では、研究、理論、診断のいずれにとっても、人格に五つのレベルを分けるのが、實際上、最も効果的であるというのである。(2, P. 76)

④ レベルの操作的定義

これらのレベルは、適切なデータをもたらす〈操作〉のタームで定義される。データのソース（種類と蒐集法）が、分類レベルを自動的に決定しているのである。こうして、人格の五つのレベルは、操作的に定義されている。(2, P. 77)

各レベルの意義については、すでに報告済みであるが、⁽⁸⁾ データ測定法等を加え、改めて総括する。

I レベル I 公共的コミュニケーション

① レベル I データ

16の変数の円形連続体^(8,9)にそって、他者によって評定された、個人のあらわな（顕在的）行動から成る。ここで扱うのは、本人が、対人場面を共にする他者に対して、《していること》、

すなわち、対人効果、対人的圧力（“社会的刺激価”）である。彼の《いうこと》とは異なる。(2, Pp. 91-92)

② レベルⅠ行動の単位：《対人反射》

レベルⅠ行動の個々の単位を、《対人反射》と呼ぶ。この反射は、対人場面に対する自動的、非意志的反応であり、言語的コミュニケーションとは異なることが多い。(2, P. 96) この反射は、コミュニケーションの言葉の背景として働きやすい。われわれが意識的に注意するのは、後者の方であるが、事件の対人的意義を与えるのは前者の方なのである。対人反射は、意識的であることを要さないが、かの古典的“無意識”と等しいわけではない。本人の気づけるものもあれば、気づけないものもある。(2, Pp. 98-99)

③ 対人反射の選択性

だれでも特定の対人反射を一貫して用いやすい。人が、特定の人に対しては、一貫して特定の反応をしやすい、相手からも特定の反応を引出す傾向がある時には、一定の役割関係が存在する。大ていの人が、特定の自動的役割パターンを見せる。それは、その人の生活における“重要な他者”の前では、自動的に引受けるものである。この役割は、特定の対人的意図を表現するものである。(2, Pp. 109-110)

④ 対人反射の機能

対人反射は、対人的意図の自動的伝達法であり、不安を軽減するように対人関係を処理するための、最も経済的な方法である。本人の対人反射のレパートリーの組織的評価こそ、機能的診断の主要関心事である。(2, P. 97)

⑤ レベルⅠ行動の測定法

レベルⅠ-S：仲間の人びと、または、熟練したオブザーバーによるソシオメトリックな評定（行動観察の要約）。レベルⅠ-R：実際の社会的場面における個人の行動の、熟練したオブザーバーによる逐一的評定（直接の行動観察）。レベルⅠ-M：MMPIによる症候行動の評定（検査に対する反応を、臨床家に対する訴え、メッセージとして扱う）。その他に臨床用の2種の専門的方法がある。(2, P. 78)

2 レベルⅡ 意識的コミュニケーション

① レベルⅡデータ

人が、自分自身と自分の世界（他の人びと）についての認知を、意識的に、また言葉で報告した内容より成る。ここでは、本人の報告した、彼自身と彼の対人的世界についての認知に関心する。言語的報告の客観的妥当性とか言葉の背後に潜在する深い意味などについては、問題にしない。ここで扱うのは、意識的報告であって、《意識》ではない。それ故、《意識的記述、または意識的コミュニケーション》のレベルと呼ばれる。(2, P. 132)

レベルⅡの二つの下位レベル：人が自分についていうことは、すべて〈レベルⅡ-Self（自己）〉になる。彼が自分に関係ある他者について述べることは、すべて〈レベルⅡ-Other（他者）〉のデータになる。

② レベルⅡ行動の単位：《対人的特性》

自分と他者についての意識的報告の言葉は、すべて形容詞、限定詞である。それは、自分または他者の〈性質〉を述べるものである。そこで、意識的報告の言葉を測定する基本的単位を、

《対人的特性》と呼ぶ。(2, P.134) レベルⅡ データは、次のような一般的限定詞の形に翻訳できる。“○○的な他者との関係においては、私は○○的な人間である”。(2, P.133)

③ レベルⅡの機能的価値

意識的報告は、最も簡単で、最も直接的な人格測定法である。しかし意識的報告のデータの意味は、それ自体では明らかではない。他のレベルのデータと対照して、組織的に評価しなければ、その意味は曖昧である。人が何を〈云う〉かは、何を〈目指している〉かに左右される。何を目指すかは、対人的文脈（相手、事態）により異なる。したがって、意識的報告のデータは、〈時〉と〈対人的文脈〉と〈人格の他のレベルとの関係〉の、三つの光に照らして検討しなければならない。(2, Pp.145-150)

レベルⅡデータが最大の価値を発揮するのは、それを他のレベルのデータと比較する時である。それは、単にレベルⅡデータの意味を明らかにするのみではない。同一視、投射、転移、抑圧、理想視、自己受容等について有益な手がかりを提供する。

④ レベルⅡ行動の深さの考慮

意識的報告の“深さ”は、測定が行なわれる対人的文脈、測定道具、時間によって異なる。一度や二度の測定で、個人の内的世界の全範囲を打診できるものではない。時を変え、方法を変えて、可能な限り多様なタイプの報告を得て、一連のレベルⅡ行動を打診することが望ましい。(2, Pp.150-151)

⑤ レベルⅡ行動の測定法

レベルⅡ-C：患者が、自己と他者についての見解をチェックした ICL のスコア、Ⅱ-Di：診断面接の場で表現された言語的内容の、熟練した評定者による評定。Ⅱ-A：患者が誌した自叙伝の内容の、熟練した評定者による評定。Ⅱ-Ti：治療面接における言語的内容の、熟練した評定者による評定。(2, P.78)

3 レベルⅢ プライベートな象徴化

① レベルⅢデータ

人が現実の世界の現実の自己について、直接に表現したものではなく、間接的、プライベートな空想の世界における、空想上の自己や他者について表現したものである。人の報告した夢、空想、創造的表現、投影法テストへの反応中の人物に与えられた、対人的動機と行為が、レベルⅢの主題である。(2, P.184)

これらは、“前意識的”または象徴的表現と呼ばれる。本人と彼の対人的世界の、直接には表現されないプライベートな側面を、間接的に表現、または象徴するからである。この定義による“前意識的”なるタームは、精神分析学でいうそれとは異なる。(2, P.154)

② レベルⅢ行動の単位：《対人的象徴》

レベルⅢ行動の単位を、《対人的象徴》と呼ぶ。このレベルも、レベルⅡと同様、主人公 (Hero, Heroine) と他者 (Other) とに分けられる。空想や夢のストーリー中の主人公は、《象徴的自己》(Ⅲ-Hero)、彼と交渉するまわりの登場人物 (脇役) は、《象徴的他者》(Ⅲ-Other) とする。(2, P.166) この二つは、“前意識的”レベルの二つの下位レベルである。後者は、前者よりも一そう“深い”。(2, P.168)

下位レベルの区別の意義： 象徴的他者に帰せられるテーマ (感情、動機) は、本来は、そ

の人の人格の一部である。しかし、自己のものとして認めることが危険であるために、他者に《投影》されたものである。他者の中に投射された感情、動機は、それが全く現われない時よりも、再び自己の中にとり戻される可能性がある。したがって、レベルⅢに二つの下位レベルを区別することは、臨床的にも有用性が高い。(2, P.168)

③ 象徴の機能

a) 〈象徴はプライベートな“前意識的”言語である〉： 象徴的表現は、他人に対するコミュニケーションではない。自分自身に対する自閉的コミュニケーションである。夢や空想が表現するのは、外界の事件ではなく、個人の内界の出来事である。それは、人の内界からの通信であり、個人のかくれた願望、動機を、本人自身に対して伝達するものである。したがって、象徴は、個人のプライベートな前意識的言語と考えられる。それ故、象徴的表現（夢や空想）の意味は、全くプライベートなものであり、当人の人格全体と、生活の背景、報告する対人的文脈などを抜きにしては理解されない。(2, Pp.161-162)

b) 〈象徴は不安を軽減する〉： 人間は、直接的行動の招く不安を避けるために、間接的行動を発達させる。〈象徴言語の手段によって、直接的表現を制止された危険なテーマ（動機）も表現可能になる〉。また、〈直接的表現において表明されたテーマを、象徴的レベルでも反復することにより、直接的表現を制止されている危険なテーマの表現を、一そう避けることも可能である〉。この場合には、象徴的表現は、不安を招くおそれのある危険なテーマを、一そう回避する手段になる。(2, Pp.162-163)

④ 象徴的表現の臨床的価値

a) 〈象徴は、不安のソースと程度を指示する〉： レベルⅠ、Ⅱ、Ⅲを通して、一貫して同じテーマを反復するとしたら、象徴という間接的な形でさえ表現できないほどの、強い不安をおびたテーマの存在を物語る。反対に、レベルⅠ、Ⅱを通じて表現を回避されたテーマが、レベルⅢ（象徴）で、初めて現われるとしたら、そのテーマの伴う不安は、それほど強くはなく、その人の行動には、柔軟性、変化の可能性があると仮定できる。また、象徴の中に表現される〈新しい〉テーマは、予想される変化の方向についても示唆を与える。(2, P.163)

b) 〈象徴は未来の行動を予見する〉： 象徴的、間接的、“前意識的”活動は、人間に不可欠である。人間は時間に制約されるものだからである。人は、絶えず葛藤する諸傾向の二者択一に迫られる。衝動の延期ということが、人間行動に不可欠の特徴となる。人は、常にある行為を選び、他の行為を制止する。一般に、不安のより少ない方に動く。(2, Pp.164-165) したがって、機能的見地からみれば、プライベートな象徴的レベルで表現されるものは、公共的、または少なくとも意識的表現のレベルへのポテンシャルティである。

もし、この理論が正しいとすれば、象徴は与えられた人格構造の中で働いている不安の程度と共に、変化の可能性の有無と予想される変化の方向について、一つの見積りを提供する。(2, Pp.165-166)

⑤ レベルⅢデータの“深さ”

a) レベルⅢの夢や空想データを得たとしても、必ずしも、その人のプライベートな世界に触れたとはいえない。空想やTATストーリーが、個人のプライベートな感情を、自動的に反映するとは限らない。レベルⅢデータの“深さ”は、データのソースに応じて様々である。意識的報告に近いものから、夢に現われるものまでである。(2, P.186)

象徴的反応の正確な“深さ”は、次の三つの要因に依存する。測定道具（夢、空想の報告、

自由連想, TAT など), 対人的文脈 (夢や空想を報告する場面と相手), 他のレベルとの関係 (レベル I, II との関係) の如何に左右される。特に, 意識的報告の層の深さと防衛の壁の厚さとは, 決定的な要因である。(2, Pp.186-188)

b) 象徴的テーマは, 必ずしも“前意識的”ではない。意識的なものと, 常に対立するものではない。(2, P.184) 顕在的なレベル (I, II) で使われた安全仕事を, 単に反復することもあれば, 反対のものにより, バランスをとることもある (2, P.181) 前者の場合は, 人格構造の“硬さ”, または意識的防衛過程の厚さを示唆する。後者の場合は, 顕在的レベルとの“葛藤”を示唆する。それ故, 象徴的表現の意味は, 常に全人格構造全体のタームで評価しなければならない。(2, P.181)

⑥ 対人的象徴の測定法

これには, 七つの方法がある。レベル III-T (TATストーリー中の対人的テーマの評定)。III-F (空想ストーリーの対人的テーマの評定)。III-D (夢のプロトコール中の対人的テーマの評定)。III-M (前意識的行動を予見する MMPI の指標)。その他, 三種の投影法形式のテストへの反応の評定が利用される。(2, P.79)

4 レベルⅣ 表現されないもの

① レベルⅣデータ

人格の最深のレベルは, 《表現されないもののレベル》と呼ばれる。これは上記の四つのレベル (I, II, III-Hero, III-Other) で, 一貫して有意に, 特別に, オミット (省略) されている対人的テーマから成る。(2, P.192) 行為や意識的報告は勿論のこと, 夢や空想にさえ表現されない対人的動機である。

② レベルⅣの単位: 《有意なオMISSION》と《回避》

レベルⅣを規定する二つの基準がある。a) 消極的基準: 上の四つのレベルで, 一貫して表現から省略されているテーマであること: 《省略》。b) 積極的基準: 積極的に回避されているテーマであること: 《回避》。(2, Pp.192-193)

③ レベルⅣの機能的価値

人格のこのレベルは, 臨床的には関心をもたれてきたが, 経験的研究が乏しいため, Leary, et al. の対人的診断の体系には, 公式には含められない。その代わりに, 表現されない動機を防ぐために築かれている, 一そう上のレベル (“自我機能”) を中心にしている。(2, P.193)

しかし, 診断という機能的見地からみれば, 表現されないテーマの存在は重要である。表現されないテーマは, 強い不安を帯びたものと考えられる。もし, それに直面したら, 当人は強いパニックに陥るであろう。そうとすれば, レベルⅣは, 最も強く, 最もがむしゃらに回避される, 立入禁止の《危険地帯》を明らかにするものである。(2, P.193) また, 四層にわたる回避は, そのテーマの呼びおこす不安に対する, 《防衛の壁の厚さ》と《硬さ》とを示唆する。

④ レベルⅣの測定法 (試案的)

a) 《オMISSION》の測定法: レベル I, II, III-Hero, III-Otherの得点を検討して, 一貫してオミットされている行動を発見する。これには, プロフィール (グラフ) の検討と, 算術的方法とがある。後者によればレベルⅣデータを単一の要約点によって表わすことができる。レベルⅣオMISSION得点は, 表現されたものの平均要約得点を計算し, 全体 (100) から減

算すれば得られる。(2, P.195) (詳細は次報にゆずる。)

b) 有意な《回避の測定法》： 1) 統計的方法 (普通の人なら肯定し、表現するテーマを肯定せず、表現しない傾向の評価)、2) 抑圧のテスト (Ifund test による記憶における防衛：選択的忘却を確かめる手続)、3) 知覚における防衛のテスト (知覚防衛の測定：閾下刺激の認知閾の測定による)。(2, Pp.196-199)

5 レベルV 価値

① レベルVのデータ

人間行動には今一つ別の領域がある。それは、自分の価値体系、理想についての、人の意識的記述から成る。

レベルVという数字は、最深のレベルを意味するのではない。レベルVは、意識的に報告された理想に関するものであり、“深さ”の点では、レベルII意識的コミュニケーションのレベルと同等である。しかし、レベルVは、人格の独立した領域である。自分の理想についての報告は、意識的自己記述 (現実自己、自己概念) や空想的表現 (プライベートな価値体系) とは異なる。その機能においても、臨床的価値においても。(2, P.201)

② 価値体系の機能

対人行動の機能は、生存上の不安を避けることにある。この観点からみれば、価値体系の機能は、不安に対する防波堤を提供することにある。社会の一定の標準を理想として受容れることにより、人は強力な社会に自分を結びつけることができる。したがって、人は不安を防ぎ、是認をかちとるために、様々な価値体系 (行動の規範と理想) を発達させるのであろう。(2, P.202)

③ レベルVの臨床的価値

レベルVは、非常に簡単ではあるが、有用な診断道具である。a) 人の価値体系 (自分に対してどんな標準を課しているのか) について洞察を与える。b) 他のレベルとの比較：レベルVのもつと有用な用法は、他のレベルと比較することである。理想とレベルII-Selfとの一致または不一致は、《自己受容》、または《自己への不満》の程度についての指標を与える。

理想とレベルII-Other (家族または友人) との一致、不一致は、《理想視》、または《非理想視》の指標を提供する。(2, P.205)

④ レベルV測定法

質問紙、チェックリスト、面接、自由連想により、当人の価値観に関係する表現を選び出す。代表的方法としては、V-C (ICLによる理想の評定)、V-Di (診断面接中に表現された患者の理想の、熟練した評定者による評定)、V-Ti (治療面接中に表現された患者の理想の、熟練した評定者による評定) の三種がある。(2, P.204)

(近年、「人格のレベル」と題する一書が現われたが、⁽¹⁾それは、一人の人間の深さを考慮したものではなく、人格理論の整理を理論的に試みたものである。したがって、Leary, et al.とは、レベルの概念が異なる。)

III 筆者の改訂版

既報のように、Leary, et al. による人格の対人的診断法は、本来、1) 心理療法に先立つ、クライアントの人格構造の組織的な評価と、2) 治療による変化の予見および、3) 治療中と治療後の人格構造変化の測定を目的としたものであり、精神科医療の分野での臨床的目的から開発された診断体系である。(10)

そのデータ測定法においても、診断方法においても、組織的、包括的で、複雑多岐にわたり、専門外の者には近よりがたい点が少なくない。

筆者は、この対人的診断法について、1957年以来、多年にわたり検討を続けてきた。筆者の対人的診断法研究の目的は、次の三点にある。第一は、日本人向きの改訂版を作成すること (e. g. ICL 日本版作成の試み)。(9) 第二は、病者や異常人格の臨床診断という、せまい臨床分野から開放し、正常人の人格の研究と理解のために活用すること。さらに第三は、専門家向きの臨床目的や研究目的を超えて、広く一般人の自己理解と他者理解に活用できるよう、簡易化、平易化することである。

これら三点については、人格心理学の学習者と共に、この診断法の簡略化と平易化に努め、たとえ専門家でなくても、少し練習さえ積めば、日常生活での自己と他者の対人関係の理解と改善に活用できるよう、改訂を重ねてきた。ここに、人格のレベルと対人行動の測定法、データの表記法等についての改訂を報告する。

1 人格のレベルの分類について

Leary, et al. は、人格の対人関係理論構築のために、九つの作業原理 (必要条件) を設定しているが、その中の二つがレベルの決定に関するものである。それらは次の通りである。

- 1) 人格についての如何なる陳述も、それが言及する人格のレベルを指示しなければならない (作業原理 V)。(2, P. 41)
- 2) いかなる理論体系においても、人格のレベルは明確にリストされ、定義されなければならない。各レベル間の形式的関係は、予め概説されていなければならない (作業原理 VI)。(2, P. 42, 59)

(また、各レベルは、データの種類によって、すなわちデータ蒐集法のタームによって、《操作的》に定義されなければならない)。(2, P. 200)

これらの作業原理は、人格の科学の樹立にとって、尤もな必要条件と認められる。また、そ

Table 1 人格の五つのレベルの分類

	Leary, et al.	筆 者 の 改 訂
レベル I	公共的コミュニケーション	公共的表現 : <行 為>
レベル II	意識的コミュニケーション	意識的表現 : <認 知>
レベル III	プライベートな象徴化	象徴的表現 : <潜在的動機>
レベル IV	表現されないもの	表現されないもの : <さらに潜在的な動機>
レベル V	価 値	価 値 : <理 想>

れに基づく、人格のレベルの五つの分類も妥当なものと認められる。ただし、レベルの分類それ自体は、原法に拠りながらも、各レベルの表現は、別記のように、平易な表現に改めた (Table 1)。

2 測定法の統一とデータ表示法の改訂

① データ測定法の統一

原法によれば、各レベルのデータ測定法は、多様にある。これらは、いずれも各レベルの下位レベルを表わすものとしては、有意義と認められる。しかし、原法のデータ測定法は、本来、臨床的目的のための測定法であり、余りに専門的、特殊的で、素人には近づきがたいものが少なくない。

例えば、レベルⅠ《対人反射》の測定には五種、レベルⅡ《対人的特性》の測定には四種、レベルⅢ《対人的象徴》の測定には七種、レベルⅣ《有意なオMISSIONと回避》の測定には五種、レベルⅤ《自我理想》の測定には三種と、多数の方法があげられているが、これらは、いずれも専門家による評定を要するものである。

そこで、対人的診断法の普及化のために、データ測定法の統一による簡略化を試みた。レベルⅠ、Ⅱ、Ⅴの三つのレベルの測定には、筆者の「ICL 改訂版」⁽⁹⁾による測定を代表的方法として、統一した。レベルⅢについては、TATによる測定、レベルⅣについては、算術的方法による《有意なオMISSION》得点を利用することにした。その結果、データの測定は、大巾に簡略化され、素人にも近づきやすいものとなった。

② データ表示法の改訂

原法によれば、一つのレベルのデータでも、その測定法の差異により、多様なデータがある。そこで、データの種類の区別のために、データの一般的レベルをローマ数字で示し、下位レベルのデータ蒐集法の操作を、コード文字で示して区別する必要がある。^(2, P.77) 例えば、レベルⅢ-Dは、夢から得られたプライベートな対人的象徴を意味し、レベルⅢ-Tは、TATストーリーから得られた対人的象徴を意味する。

しかし、筆者の改訂では、データの測定法を統一したので、データ蒐集法の差異を示す必要はなくなった。そこで、ローマ数字は、一般的レベルを示すが、コード文字は、下位レベルとしての〈自己〉と〈他者〉の区別を示す手段として用いることにした。その結果、Ⅰ-Sは、レベルⅠの自己データを、Ⅱ-S、Ⅱ-Oは、レベルⅡの自己と他者のデータを、Ⅲ-H、Ⅲ-Oは、レベルⅢの象徴的自己と他者を示す記号とし、データの区別を平易化した。

ただし、レベルⅣとⅤについては、自己と他者の区別は不可能であるので、下位レベルを示すコード文字はつけないことにした。

3 データの追加

自己-他者の相互作用の測定について

a) 他者の評定： 対人関係は、相互作用である。Leary, et al.によれば、主人公と他者とのやりとりを組織的に説明するためには、「本人の行動を測定する変数、または変数体系と共に、彼の対人的世界（他者）の行動を測定する、等価なセットを必要とする（作業原理Ⅳ）」

という。(2, P. 83) このことは、本人の対人反応と、本人が相互作用する他者の対人反応を、《別々に》カテゴリー化し、要約することで達成されるとしている。(2, P. 83)

しかし相互作用する〈他者の行動の評定〉については、主人公の対人的世界（他者）についての、主人公による記述の評定（主人公が他者に帰するテーマ）をもって代えている。(2, P. 84) これは、他者についての意識的報告（筆者のⅡ-O）であり、第三者による客観的評定ではないし、また、他者自身による評定でもない。いわば、主人公の自己認知と他者認知の評定のみで、〈相互作用〉の測定を代用していることになる。筆者は、この欠陥の克服のために、主人公の他者認知（Ⅱ-O）のみではなく、相互作用する他者自身の側の自己認知の評定を追加し、これをⅡ-S（O）（他者の自己像）とした。（なお、他者のデータについては、〈Ⅰ-O（第三者に評定された他者の対人行動の要約）〉も考慮中である）。

b) 〈関係自己〉の追加： Leary, et al. は、レベルⅡ-自己の測定に当って、一般的自己像としての自己記述（筆者のⅡ-S）のみを用い、〈特定の他者との関係における自己〉のデータを求めてはいない。しかし、人は、一定不変の抽象的な一般的自己像（Ⅱ-S）により、他者と相互作用しているのではない。自分の生活における様々な《重要な他者》との関係に応じて、様々な〈他者との関係における自己像〉を、もっている。この自己像は、相互作用の相手に応じて変動する。そこで、相互作用の観点からも、〈特定の他者との関係における自己：関係自己〉のデータが必要とされる。これを筆者は、Ⅱ-S' と命名して追加している。

Ⅱ-S（O）とⅡ-S'の追加により、筆者の対人的診断においては、Ⅰ-S、Ⅱ-S、Ⅱ-O、Ⅲ-H、Ⅲ-O、Ⅳ、Ⅴと合わせて、合計九種類のデータを用いることになった。その点では、レベル間、データ間の関係の診断においては、組み合わせが増加し、やや複雑にはなったが、対人的相互作用の理解の点では、一そう妥当なものになったといえよう。

4 おわりに

① 以上のように、人格のレベルの分類についても、原法に準拠しながらも、平易な表現に改めた。各レベルの対人行動の測定法とデータの表記法についても、簡略化、平易化を目指してきた。筆者の改訂版は、臨床の専門家向きの方法を、いわば素人用に改訂した点で、簡便法、または普及版と呼ぶべきものであろう。熟練した評定者による評定ではないため、評定の主観的偏りは免れない。しかし、簡易化、普及版化により、失われるものよりも、得られるものの方が遙かに多いと筆者は信じている。

また、簡略化の方向で進みながらも、必要なデータの追加は怠らなかった。

② Leary, et al. (Kaiser 財団病院心理学研究プロジェクト) による、人格の対人的診断法の体系は、しっかりした理論的基礎と堅実な方法論的基礎とを兼ね備えた、組織的、包括的な人格診断法の体系である。壮大なスケールと共に、謙虚さと堅実さを兼備した、優れた構築である。

しかし、この対人的診断法の体系は、一組の測定道具というよりも、方法である。まだ、未熟であり、限界がある。(2, P. 457) 結論というよりも、出発点である。完成した体系というよりも、未完成のカテドラルである。そこには、掬めどもつきせぬ無限の源泉がある。

文 献

1. Cook, M. Levels of Personality, Holt, Rinhart & Winston, London, 1984, Pp.6-9.
2. Leary, T. (ed) Interpersonal diagnosis of personality, Ronald Pr., N. Y., 1957.
3. Murray, H. A. Explorations in personality, N. Y. Oxford, 1938.
4. Sullivan, H. S. Conceptions of modern psychiatry, The William Alanson White Publication Foundation, N. Y., 1947.
(中井久夫訳『現代精神医学の概念』, みすゞ書房, 1976. p.22)
5. 太田久紀『仏教の深層心理』, 有斐閣, 1983, Pp.31-33, 81, 109-129.
6. 大西憲明他『性格の心理』, 金子書房, 1952, p.57.
7. シュナイデル(懸田克躬他訳)『精神病質人格』, みすゞ書房, 1954, Pp.43-45.
8. 戸辺正人 臨床心理学における診断の問題Ⅱ—パーソナリティの対人的診断—, 愛媛大学紀要, 第5部, 第4巻, 21-34, 1957.
9. 戸辺正人 対人関係の研究(1)—ICL 性格評定票の作成—, 愛媛大学教育学部紀要, 第1部, 第23巻, 41-56, 1977.
10. 戸辺正人 対人関係の研究(2)—人格の対人的次元について—, 愛媛大学教育学部紀要, 第1部, 第36巻, 1-10, 1990.
11. 仲野良俊『深層意識の解明』, 法蔵館, 1985, Pp.5-16.
12. フロイト(高橋義孝・全面改訳版)『夢判断』(1900), フロイト著作集2, 人文書院, 1968, Pp.444-445.
13. フロイト(井村恒郎訳)「無意識について」(1915), 『自我論』, フロイト選集Ⅳ, 日本教文社, 1954, Pp.191-240.
14. フロイト(井村恒郎訳)「自我とエス」(1923), 『自我論』, フロイト選集Ⅳ, 日本教文社, 1954, Pp.241-306.
15. ユング(松代洋一他訳)『自我と無意識』, 思索社, 1984, Pp.11-27.
16. ユング(高橋義孝訳)『人生の午後三時—無意識の心理学』, 新潮社, 1956, Pp.108-109.